

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士（心理学）	氏名	神 谷 真 由 美
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因の検討 —心理社会的課題，愛着スタイル，自己対象体験との関連—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 岡 本 祐 子            審査委員 教 授 兒 玉 憲 一            審査委員 教 授 中 條 和 光</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因の関連性について、Erikson の心理社会的課題，Bowlby の愛着スタイル，Kohut の自己対象体験の3つの視点から検証したものである。本論文は、以下の5つの章から構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は、第1節「青年期の自己愛に関する研究の動向」、第2節「Kohut の自己の発達に関する研究の動向」、第3節「本研究の目的」からなる。第1節では、本研究の背景を展望し、我が国の青年理解を深めるためには、自己愛的脆弱性に着目する必要があることを述べた。第2節では、本研究の理論的基盤である Kohut の研究の動向を概観し、自己愛的脆弱性の高低による分析のみでなく、その特質を質的に検討する必要性を指摘した。第3節では、以上の背景を踏まえ、本論文では、①非臨床群の青年における自己愛的脆弱性のサブタイプを見出し、その質的な相違について検討を行う（研究1）、このサブタイプにもとづき、②自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚および愛着スタイルとの関連を検討する（研究2）、③自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連を検討する（研究3）という本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章「自己愛的脆弱性による青年の類型化（研究1）」は、大学生を対象に、青年の自己愛的脆弱性を自己愛的脆弱性下位尺度の組合せで類型化し、そのサブタイプについて検討した。その結果、自己愛的脆弱性低群（以下、NV 低群）、自己愛的脆弱性高群（以下、NV 高群）、抑制優位群、自己緩和困難群の4つのサブタイプが見出された。</p> <p>第3章「自己愛的脆弱性と心理社会的課題および愛着スタイルとの関連」は、第1節「自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連（研究2-1）」、第2節「自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連（研究2-2）」からなる。研究2-1では、自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚との関連を検討した結果、自己愛的脆弱性の全般的な低さが、Erikson の心理社会的課題の達成感覚の高さと関連していることが示された。研究2-2では、自己愛的脆弱性と愛着スタイルとの関連を分析し、「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」の高さが、不安定な愛着スタイルと関連していることが示された。</p> <p>第4章「自己愛的脆弱性と自己対象体験との関連」は、第1節「自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験との関連（研究3-1）」、第2節「自己愛的脆弱性と親との自己対象体験との関連（研究3-2）」、第3節「自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連（研究3-3）」</p>			

からなる。研究 3-1 では、自己愛的脆弱性と現在の自己対象体験の関連を検討した結果、自己愛的脆弱性サブタイプと Kohut の「鏡映自己対象体験」、「双子自己対象体験」で有意な関連性が認められた。研究 3-2 では、自己愛的脆弱性と、青年の回想的な語りによる、幼児期から青年期までの親との自己対象体験との関連を検討した。その結果、NV 低群と自己緩和困難群は、幼児期・児童期に親との十分な自己対象体験があり、NV 高群と抑制優位群は不十分であることが示された。多様な自己対象体験が蓄積されることが、自己表現への抵抗の少なさという自己愛傾向の健康的な側面の発達と関連し、自己対象体験の不全が、自己の不安定さや自己表現の抑制と関連することが示唆された。研究 3-3 では、母子画を用いて自己愛的脆弱性と自己対象体験の無意識的側面との関連を分析したが、有意な相違は認められなかった。

以上より、NV 低群は、心理社会的課題の達成感覚が高く、安定した愛着スタイルを有し、幼児期・児童期に十分な自己対象体験があることが示された。一方で NV 高群は、心理社会的課題の達成感覚が低く、不安定な愛着スタイルをもち、幼児期・児童期の自己対象体験が不十分であり、未成熟な自己対象体験への欲求が持続していることが示された。また自己緩和困難群は、自己のあり方に関する心理社会的課題の達成感覚が低い、安定した愛着スタイルであり、幼児期・児童期に十分な自己対象体験をもち、共感的な自己対象体験を求めることが示された。一方で抑制優位群は、心理社会的課題の達成感覚が低く、不安定な愛着スタイルであり、幼児期・児童期の自己対象体験は不十分であるとともに、自己対象体験への欲求を抑圧していることが示された。これらの結果より、自己愛的脆弱性の形成には、発達早期からの環境の影響が関連していることが示唆された。

第 5 章 「総合考察」では、第 1 節にて 本研究の成果を、第 2 節にて、本研究の限界と今後の課題について述べた。

本論文は、青年期の自己愛的脆弱性と発達早期要因に関する発達臨床心理学的研究として、次の 3 点において高く評価することができる。

- 1) Kohut の理論にもとづき、非臨床群の青年の自己愛的脆弱性を類型化し、自己愛的脆弱性の 4 つのサブタイプを見出し、青年の自己愛的脆弱性の特質をより明確に捉えたこと。
- 2) 自己愛的脆弱性と心理社会的課題の達成感覚、愛着理論、自己対象体験との関連を検討し、自己愛的脆弱性の形成の背景にある、発達早期からの環境との関係を実証的に明らかにしたこと。
- 3) 自己愛的脆弱性の視点から青年を理解する際、自己愛的脆弱性の高低のみに注目するのではなく、その特質を含めて検討する必要性を示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 26 年 2 月 10 日